

朗読
CD
付

高森顕徹

光に向かって 100の花束 ベストセレクション 20

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

約束は、必ず、はたさなければならない
忙しい人ほど勉強できる……暇を盗む
夫婦はもともと他人である。

だからケンカもする

花嫁が泣くのは、初めて親心の
ありがたさを知るからだ
一職を軽視する者は、どんな
地位におかれても、不平を
もつ……秀吉の心がけ

「どうぞ」の一言とほほ笑み
に、すっかりほれこんで
しまった

本来の女性は、
人生の大地のような
人を身なりで判断はでき
ない……一休と門番

富んでも、昔の貧しさを
忘れ、おごるなかれ
……岩崎弥太郎氏とその母

一番おいしいものは塩、
一番まずいものも塩

この柱も痛かったのよ

……うるわしき母子

お嫁にいったら、毎日よい着物を
着て、おいしいものを食べて、
よくお化粧するのですよ

かんしゃくの、くの字を
捨てて、ただ感謝

一番好きな人を生命がけ
で育ててくださった
お母さんが、一番好きです
先生、毒薬を一服盛って
ください……名医の処方
にこやかな笑顔と、明るい
あいさつほど世の中を
楽しくするものはない

施した恩は思ってはならぬ

受けた恩は忘れてはならない

己を変えれば、夫も妻も子供も
みな変わる

「ここだなあ」と思い出せ

……苦難の嵐に向かって

悪人ばかりだとケンカにならない

……一家和楽の秘訣



大切な
忘れ物を
届けに来ました

1万年堂出版

CD付

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

光に向かって

100の花束

ベストセレクション **20**

高森顕徹



1万年堂出版

著者略歴

高森 顕徹 (たかもり けんてつ)

昭和4年、富山県生まれ。

龍谷大学卒業。

日本各地や海外で講演、執筆など。

著書『光に向かって100の花束』

『なぜ生きる』(監修)など多数。

CD付 光に向かって100の花束 ベストセレクション20

平成13年(2001)9月11日 第1刷発行

著 者 高森 顕徹

朗 読 柴田 秀勝 鈴木 弘子

発行所 1万年堂出版

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5F

電話 03-3518-2126

FAX 03-3518-2127

<http://www.10000nen.com/>

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© Kentetsu Takamori 2001, Printed in Japan

ISBN4-925253-02-6 C0095

乱丁、落丁本は、ご面倒ですが、小社宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。



1 この柱も痛かったのよ——うるわしき母子 6

2 にこやかな笑顔と、明るいあいさつほど

世の中を楽しくするものはない 10

3 一職を軽視する者は、

どんな地位におかれても、不平をもつ——秀吉の心がけ 14

4 忙しい人ほど勉強できる——暇を盗む 18

5 本来の女性は、人生の大地のようである 22

6 先生、毒薬を一服盛ってください——名医の処方 26

7 「どうぞ」の一言とはほ笑みに、

すっかりほれこんでしまった 30



8 花嫁^{はなよめ}が泣^なくのは、

初^{はじ}めて親^{おや}心のあ^{こころ}りがたさを^し知るからだ

34

9 一^{いち}番^{ばん}好^すきな人^{ひと}を^{いのち}生^い命^{めい}が^{そだ}けで^{そだ}育^{そだ}ててく^{そだ}ださ^{そだ}った

お母^{かあ}さん^{かあ}が、一^{いち}番^{ばん}好^すき^すです

38

10 か^かん^{かん}し^しゃ^{しゃ}く^くの、く^くの^く字^じを^す捨^すてて、た^ただ^だ感^{かん}謝^{しゃ}

40

11 「こ^ここ^こだ^だな^なあ」^{おも}と^{おも}思^だい^だ出^だせ――苦^く難^{なん}の^{あじ}風^{ふう}に^む向^むか^かつて

46

12 人^{ひと}を^み身^みなり^みで^み判^{はん}断^{だん}は^みで^みき^みない――一^{いつ}休^{きゅう}と^{もん}門^{ばん}番^{ばん}

50

13 お^{よめ}嫁^{よめ}に^{よめ}い^{よめ}つ^{よめ}たら、毎^{まい}日^{にち}よ^よい^よ着^き物^{もの}を^き着^きて、

お^たい^たしい^たもの^たを^た食^たべ^たて、よ^けく^けお^け化^け粧^{しょう}する^けの^けです^けよ

54

14 夫^{ふう}婦^ふは^ふも^ふと^ふ他^た人^{にん}で^たある^た。だ^たか^たら^たケ^たン^たカ^たも^たする^た

58



15 己おのれを変かえれば、夫おとも妻つまも子こ供どももみな変かわる 62

16 悪人あくにんばかりだとケンカにならない——一いっ家か和わ楽らくの秘ひ訣けつ 65

17 約やく束そくは、必かなず、はたさなければならぬ 70

18 施ほした恩おんは思おもってはならぬ

受うけた恩おんは忘わすれてはならない 74

19 富とんでも、昔むかしの貧ますしさを忘わすれ、おおごるなかれ

——岩いわ崎さき弥や太た郎ろう氏しと母は 78

20 一いち番ばんおおいいししいいものは塩しお、一いち番ばんままずずいいものも塩しお 82

・光ひかりに向むかかつて100の花束はなたば 書籍紹介 86

光に向かつて
100の花束



ベストセクション
20

この柱も痛かったのよ

うるわしき母子

かつて講演にゆく、車中での出来事である。

ちようど車内は、空席が多く広々として静かであった。ゆつたりとした気持ちで、周囲の座席を独占し、持参した書物を開いた。

どのくらいの時間が、たったであろうか。

読書の疲れと、リズムカルな列車の震動に、つい、ウトウトしはじめたところである。

けたたましい警笛と、鋭い急ブレーキの金属音が、夢心地を破った。機関手が踏切で、なにか障害物を発見したらしい。

相当そとうのシヨックで、前まえのめりになったが、あやうく転倒てんとうはまぬがれた。
同時どうじに幼児ようじの、かん高い泣き声なごえがおきる。

ななめ右前みぎまえの座席ざせきに、幼児ようじを連れつた若い母親わかははが乗車じようしやしていたことに気きがついた。

たぶん子供こどもに、窓ガラスに額ひたいをすりつけつけるようにして、飛とんでゆく車窓しやそうの風光ふうこうを、楽したのませていたのであろう。

突然とつぜんの衝撃しょうげきに、幼児ようじはその重い頭おもあたまを強く窓枠まどわくにぶつけたようである。子供こどもはなおも激はげしく、泣き叫なんでいる。

けがを案あんじて立たつてはみたが、たいしたことなさそうなので、ホッとした。

直後ちやくごに私は、思おもわぬほのぼのとした、心こころあたたまる情景じやうけいに接せつして、感動かんどうしたのである。

だいぶん痛みいたもおさまり、泣きやんだ子供こどもの頭あたまをなでながら、若わかきその母親ははおやは、やさしく子供こどもに諭さとしている。

「坊や、どんなにこそ痛^{いた}かったでしょう。かわいそうに。お母^{かあ}さんがウンとなでてあげましょうね。でもね坊や、坊やも痛^{いた}かったでしょうが、この柱^{はしら}も痛^{いた}かったのよ。お母^{かあ}さんと一緒に、この柱^{はしら}もなでてあげようね」

こつくりこつくりと、うなずいた子供^{こども}は、母^{はは}と一緒に^{いっしょ}になつて窓^{まど}枠^{わく}をなでているではないか。

「坊^{ぼう}や痛^{いた}かったでしょう。かわいそうに。この柱^{はしら}が悪^{わる}いのよ。柱^{はしら}をたたいてやろうね」

てつきり、こんな光景^{こうけい}を想像^{そうぞう}していた私^{わたし}は赤面^{せきめん}した。

こんなとき、母子^{おやこ}ともども柱^{はしら}を打^うつことによつて、子供^{こども}の腹^{はら}だちをしず



め、その場をおさめようとするのが、世のつねであるからである。

なにか人生の苦しみに出会ったとき、苦しみを与えたと思われる相手を探し出し、その相手を責めることによって己を納得させようとする習慣を、知らず知らずのうちに私たちは、子供に植えつけてはいないだろうか、と反省させられた。

三つ子の魂、百までとやら、母の子に与える影響ほど絶大なものはない。相手の立場を理解しようとせず、己だけを主張する、我利我利亡者の未来は暗黒の地獄である。

光明輝く浄土に向かう者は、相手も生かし己も生きる、自利利他の大道を進まなければならない。

うるわしきこの母子に、〃まことの幸せあれかし〃と下車したのであった。

にこやかな笑顔と、

明る^{あか}いあいさつほど

世^よの中^{なか}を楽^{たの}しくするものはない

ジョン・ワナメーカー^{てんじん ぼんめーかー}氏は、デパート王^{おう}といわれる。
店員募集^{みんしゅう}の広告^{こうこく}を見て、一人^{ひとり}の青年^{せいねん}がやってきた。
みずから面接^{めんせつ}したワナメーカーの質問^{しつもん}に彼は、

「イエス、ノー」

と、適切^{てきせつ}に即答^{そくとう}して少しの誤り^{あやま}もなかった。
体格^{たいかく}も立派^{りっぱ}だし、学力^{がくりよく}も十分^{じゅうぶん}。



同席者は採用を確信して疑わなかった。

ところがどうしてか、不合格になったのだ。

「たいそう、よい青年のようでしたが、どこかお気に召さないと場所がありましたか」

側近の不審にワナメーカーは、こう言っている。

「あの青年は、私の質問に、『イエス、ノー』と、ぶっきらぼうに言うばかりで『イエス・サー、ノー・サー』（敬称）と、丁寧な物言いをしなかった。

あんなふうではきつと、お客に親切を欠くことがあるにちがいない。

親切第一がモットーの私の店には、雇うわけにはゆかないのだよ」



たったの一言が、いかに大切か。

「社長が愉快げに『おはよう』とあいさつされると、一週間は楽しく働ける」

こう言っ、ワナメーカー氏の店員たちは、喜々として働き、店は栄えに栄えたという。

なにが社会奉仕しゃかいほうしといつても、にこやかな笑顔えがおと明るあかいあいさつほど、世の中なかを楽したのしくするものはない。

彼は街頭がいとうをゆく楽隊がくたいのように、四方しほうに光明こうみょうをバラまく。

笑顔えがおとあいさつを出だし惜おしむ者ものほどの、ドケチはないといつてよからう。

ちよつと目めもとの筋肉きんにくを動うごかし、わずか一言ひとこと、二言ふたことを話はなすだけで、人ひとに幸福こうふくを与あたえることができるのに、それすらもケチるからである。

シドニー・スミスは、おもしろいことを言いっている。

「少すくなくとも一日いちにちに一人ひとりを喜よろこばせよ。十年じゅうねんすれば、三千六百五十人さんぜんろっぴゃくごじゅうにんを喜よろこばせることになる。

一町村いちちょうそんあげて喜よろこばせる、寄付金きふきんを出だしたのと同様どうようだ」

まさに釈尊しゃくそんの“和顔愛語わげんあいご”の布施行ふせぎょうである。

いっしょく
一職を輕視する者は、

どんな地位ちいにおかれても、

ふへい
不平をもつ

ひでよし
秀吉の心がけ

のぶなが ひでよし いえやす
信長、秀吉、家康、三大武将さんだいぶしょうで一番いちばんの人氣者にんきものはだれか。

おそらくカンシヤク者ものの信長より、
めいろうかつたつ ひでよし ぐんばい
明朗闊達な秀吉に軍配ぐんぱいをあげるだろ
う。

いえやす ぜんこく へいてい
なるほど家康は、全国を平定し、
とくがわさんびぐねん
徳川三百年の基礎きそを築きずいたが、なにか